

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 25 日現在

機関番号：44522

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870802

研究課題名(和文)遊びの質的転換を促す幼保一体化システムの構築 - 生活の連続性を視座に -

研究課題名(英文)Construct an integrated childcare system that encourages qualitative change of play. - Perspectives on the continuity of life -

研究代表者

吉次 豊見 (Yoshitsugu, Toyomi)

湊川短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：00614877

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では認定こども園において、園と家庭や地域における遊びの循環・連環の中で遊びの質が更に高まるための保育システムの提示を目的とした。認定こども園においても季節や伝統行事に関する遊びは家庭と園で連続的に行われやすい。そこで幼保一体化されているスウェーデン就学前施設のルシア祭に関する実践と比較検討を行った。示唆されたことは、育ちや学びの過程はドキュメンテーションで日々丁寧に可視化することによって、成長を促す・披露するというねらいを行事に求める必要はなくなるということ。また、四季の行事・地域に伝わる行事の原点を大切にすることが地域や家庭との連続性を作り、子どもの生活を彩り豊かにするという点である。

研究成果の概要(英文)：In this research, we aimed at presenting a preschool system in order to further enhance the quality of play in circulation / association of play in preschool, family and area in the Center for Early Childhood Education and Care(Nintei kodomo-en) . Even in Center for Early Childhood Education and Care , play relating to seasons and traditional events is easy to perform continuously at home and in the garden. Therefore, we conducted comparative examination and practice on the Lucia Festival in Sweden pre-school facilities that are integrated into childcare. What is suggested is that by carefully visualizing the process of child rearing and learning day by day in documentation, it is no longer necessary to ask the event to encourage growth / show off. And to cherish the origin of the seasonal event / traditional event will make continuity with the region and the family, enriching the life of the child.

研究分野：保育学

キーワード：認定こども園 保育の質 スウェーデン 生活の連続性 遊びの可視化

1. 研究開始当初の背景

2012年1月OECDは「各国政府は子どもの学習と発達を向上させるために保育の質に関する基準と目標を確立すべき」という報告を出した。我が国も保育の質の確保と向上を最重要課題の一つと位置づけた『子ども・子育て関連3法』が同年8月に可決され、幼保連携型認定こども園の拡充、「幼保連携型認定こども園保育要領」の策定に関する検討が進められた。

「生活を生活で生活へ」という倉橋惣三の思想が受け継がれる日本の保育は「生活」という概念が特に重視された生活基盤型保育であり、幼保一体化制度においても幼児の「生活の連続性」は「発達・学びの連続性」と共に強く求められている。しかしながら様々な家庭環境を背景にもつ乳幼児が混在し、保育時間の長短も異なる幼保連携型認定こども園では、保育構造や保育の質、そしてカリキュラムに関する様々な課題も挙げられており⁽¹⁾、幼児の生活そして遊び(学び)が質を高めながら連続性をもつ保育環境・教育課程の構築は喫緊の課題である。

そこで本研究では幼保一体化園において幼児の生活が日々連続し、園・家庭・地域の中で遊びの質が転換しながら高まり繋がるための保育環境・援助のあり方を探るため、発達・学びの連続性という時間軸だけではなく、生活の連続性という空間軸の両軸に着目をした。

保育の質に関する研究は秋田(2011)が「子どもの発達を中心にみるならば保育過程の要因と家庭の要因が子どもに直接的に作用する」と述べているように⁽²⁾、保育の質を“過程の質”から捉える研究、その評価法開発の研究⁽³⁾も近年増加している。これらの研究の多くは、園における遊びがその過程や発達・学びの連続性という時間軸の中で質的転換をしていくことで質が高まることを明らかにしているが、筆者が幼稚園勤務時には多くの幼児が「昨日、家でもあの遊びしたよ。」と言いながら前日の遊びを続けていた。すなわち、遊びは園内だけで継続されていくものではなく、遊びの種類・内容によっては家庭や地域にも持ち込まれるのである。特に生活に密接に関わる行事場面では顕著である。季節に関する行事、地域の伝統行事等を園生活に取り入れ遊ぶ際には、家庭や地域でも同じ行事場面が繰り返されることにより遊びが連続することが多い。

奥山(1997)は行事の実践から、園での遊びが家庭での遊び、親子での遊びへと広がることによって家庭との連携が深まり、生活がより生き生きすると明らかにしている⁽⁴⁾。しかし、この奥山の研究フィールドは幼稚園であり、保護者が行事に参加することが連携の大きな要因としている。つまり、保育時間に差がある幼児が混在する幼保一体化園において、行事に関連する遊びや日常の遊びが継続されるのか、継続したならばその質に変化が

みられるのかは想定されていない。

一方、吉次(2013)は幼保連携型認定こども園における保育構造が午前と午後で分離・独立している場合、家庭との連携に困難さが生じると共に、遊びの質の転換に保育者が気付くことが難しいことを明らかにした⁽⁵⁾。これら先行研究の知見から勘案すると、家庭・地域を巻き込む遊びの循環性を作り、一つの遊びが形を変えつつ連環するためのシステムを構築することが、遊びの中にある学びの深まりをより促し、その質を高めていくのではないかと推測できる。

また、幼保の機能が一体化し国際的にも質が高い保育と評価されているスウェーデンの保育施設(förskola)は、我が国の幼保連携型認定こども園固有の特徴①保育時間の長さによる園内の経験の違い②長時間保育・短時間保育、双方の保護者との連携がある、という点でも類似している。

特にスウェーデンの伝統・四季の生活に密着したルシア祭・夏至祭などの行事に関する遊びがどのようにförskolaと家庭や地域で連続しているのかについての調査研究は、本研究独自の着眼点であるが、日本の保育でも行われている伝統的な祭りや節句など四季折々の行事に繋がる遊び場面との比較により共通性が見いだせるものである。

2. 研究の目的

以上の背景から、本研究では家庭環境や保育時間の異なる幼児が混在し生活する幼保連携型認定こども園において、園と家庭や地域における遊びの循環・連環の中で遊びの質が更に高まるための保育システムの提示を目的とする。

3. 研究の方法

(1) 幼保連携型認定こども園における遊びが園→家庭・地域→園の中で連続し循環性をもつ場面の抽出・分析から、連続するための背景とその要因を明らかにする。また、連続性の中にある質の転換点を把握し、遊びが空間軸の繋がりの中で高次に転換するために必要な条件を検証する。

〈調査対象〉

- ①H県S市公立J幼稚園
- ②H県S市公立A認定こども園
- ③H県S市私立S認定こども園

〈調査期間・観察時間〉

・平成27年4月25日～5月10日

5月の節句に焦点を当て、関連する遊び場面を抽出する

・am 9:00～10:30

〈調査方法〉

観察者1～2人によって参与観察を実施し、記録はビデオカメラで撮影、フィールドノートに詳細の記述を行った。また、行事・節句に関連する遊びを行っている幼児を担当している教諭に後日インタビュー調査を実施した。

(2) 幼保連携型認定こども園に近い特徴を有するスウェーデン förskola での継続的なフィールドワークから、ロシア祭およびロシア祭当日に至るまでの遊びの過程を観察調査する。調査園では園長・保育者への聞き取り調査・カリキュラム等からロシア祭の保育的価値を整理し、生活の連続性の中での「遊びの質的転換」を探るため園児の家庭での遊びも併せて調査分析をする。

〈調査園および調査日〉

調査にあたっては個人情報に配慮し園と保護者から許可を得られた乳幼児の遊び場を動画撮影した。その後、抽出した子どものドキュメンテーション等を基に担任の保育者へのインタビュー調査を実施した。

・ストックホルム市 公立 T-förskola

園児数 106 人 職員 25 人

調査日 2015.12.7・2016.12.7

・ナッカ市 親協同組合立 S-förskola

園児数 16 人 職員 4 人

調査日 2015.12.8

・スツヴァル市 公立 R-förskola

園児数 38 人 職員 8 人

調査日 2015.12.10・2016.12.10

・スツヴァル市 公立 S-förskola

園児数 66 人 職員 17 人

調査日 2015.12.11～15・2016.12.8

・スツヴァル市 私立 R-förskola

園児数 20 人 職員 4 人

調査日 2016.12.10

また、förskola から降園した後の幼児の遊びについては、上記公立 S-förskola に在園する 3 名の家庭訪問を行い、ロシア祭前後の家庭での遊びや実態調査を行うとともに保護者へインタビュー調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 遊びが園と家庭で連続する背景・要因

園児の遊び・クラス担任への聞き取りから、園における遊びが家庭や地域と繋がり循環していくための要因として次の 4 点が考えられた。

1. 連絡帳で遊びを伝える。

2. 週に発行するクラス便りに遊びの様子を書く。

3. 登降園の際に遊びを保護者に伝える。

4. クラスでの遊び（一斉・設定遊び）を好きな遊びの時間でも出来るような環境設定。

1～3 に関しては保護者に対して園での遊び、子どもの姿や育ちを丁寧に伝えるということであり多くの園で見られる一般的な情報公開的側面である。4 に関しては、今回季節の行事に関連する遊びを中心に観察調査したため、遊びの始まりがクラスでの同一の活動（一斉・設定遊び）場面になっていることからこのような共通点が見られると考えられた。しかし、クラスの幼児が同時に同一の遊びをおこなった後に、それらが継続して好きな遊び（自由遊び）の時間でも引き続

き行われたり、形を変えて連続したりする場があるということは家庭や地域での遊びへと引き継がれやすいのではないかと推測できる。また、園での遊びの充実度や家庭・地域で遊びに取り組める時間と場がなければ遊びは継続することも循環することもない（図 1）。

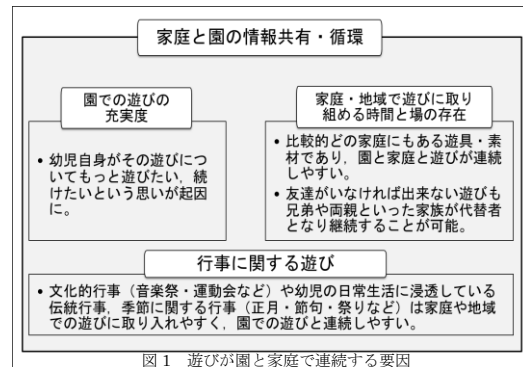


図 1 遊びが園と家庭で連続する要因

(2) 季節・伝統的行事に関する遊びの連続性—スウェーデンのロシア祭から—

①カリキュラムにおける位置づけ

スウェーデンの就学前学校カリキュラム (Lpfö 98 Revised 2010) においては日本のような「行事」に関するものの記載はない。しかし förskola で行われるロシア祭や夏至祭は多くの園で行事として一般化され、特にロシア祭に関しては伝統や歴史と深く関連がある 1 年で最も大きなイベントである。そこで地域や伝統に関する記述を探ると、子ども達の生活に関わる文化・伝統を保育の中で取り入れていくことの意義が記されている。これより考えられるスウェーデン伝統行事の保育的価値は以下となる。

・伝統や歴史、言語、知識を文化遺産として継承

・子どもの能力と文化の創造性を伸ばす

・文化への帰属を感じる

・他の文化に対する感覚と尊重の念を持つ

・地域の文化的な生活に慣れる

また、移民の多いスウェーデンでは地域の文化や伝統行事を保育の中に取り入れる際は、様々な人種、他国の文化にも配慮し互いに尊重しあえるような多様性を認めるということがより重視されている。

各 förskola では Lpfö 98 Revised 2010 をふまえて年間カリキュラムが立案されるが、その中にロシア祭の実施が記されている。特にレゾエミリアのようなプロジェクト活動やテーマ活動を多く取り入れている förskola ではロシア祭に向けて様々な遊びが関連するようカリキュラムが組み立てられている (ex: 劇遊び・長靴下のピッピ・光と影・星…など)。

②ロシア祭に向けた遊びや練習・保育者の援助

ロシア祭で歌う曲はサンタ・ロシアやジンジャーブレッダーの歌など、クリスマスソングなど定番曲であり、どの年齢であっても同じ

曲を歌うのが一般的である。その練習は各クラスでのサムリング（話し合い）の中で少し歌う程度で、日常の遊びや生活の流れは行事前であっても変わらない。またスウェーデンの保育室にはピアノはなく、歌の伴奏はほぼつけない。ギターを弾ける保育者がいる場合は簡易な伴奏をつけて歌う。

ナッカ市の S-förskola では調査日にジンジャーブリードを子どもたちが作っていた。ロシア祭の当日に保護者にふるまうためである。またどの園でもロシア祭だけではなくクリスマスに向けた飾りを製作する遊びは全員が一斉に行うのではなく、いくつかの小グループに分かれて進められる。

ロシア祭当日はロシア・星の精・ペッパーカーカ・サンタ・トムテのいずれかに子どもたちは扮するが、それは本人の希望により決められる。基本的に衣装はスーパーなどで売られているものを家庭で用意する（図2）。



図2 スーパーに売られているロシアやサンタなど

③環境構成（保育空間・壁面構成等）

ロシア祭は園で最も大きな行事ではあるが、地域や家庭と同様にクリスマスに向かうアドベントの中の一つとして位置付けられている。そのため förskola でもクリスマスツリー、トナカイやサンタクロースの製作物を室内に飾ることが多い。また家庭同様、förskola の窓際には星形のランプやアドベントのろうそくでライティングされる（図3）



図3 窓辺にアドベントスターを飾った保育室

R-förskola③やS-förskola④での5歳児の保育室にはロシアで歌う歌詞がイラストとともに掲示されていた。また短い詩の朗読をロシア祭で行うということでその詩も目につくところに貼っていた（図4）。



図4ロシアで歌う歌詞の掲示

④ロシア祭当日の流れと保育者の動き・環境

2015年は13日が日曜日だったためR-förskolaでは11日に、S-förskolaは14日に実施していた。調査園は全て日没する15時頃に保護者が集まり開催された（図5）。時間になれば全園児が持参した衣装を身につけ園庭に出て保護者の前でサンタルチアなど数曲歌う。スウェーデンではテレビの幼児番組も英語で放送されるなど幼児の頃から英語に親しんでおり、曲のいくつかは英語で歌う園もみられた

園庭に特に舞台を用意するというものではないが、クリスマスツリーを出したりロシアの人形、子どもたちが作ったランタンやランプを並べたりという程度で華美に飾り付けるものではない。ロシア祭で実質子どもたちが歌うのは長くとも15分程度であり、その後はジンジャーブリードやグロッグなどが用意されたFIKA（お茶の時間）を保護者と自由を楽しむ。そのまま降園となるのが一般的である。



図5 förskola のロシア祭

⑤生活の連続性の中にみる遊びの質的転換

ロシア祭の前日、親は子どもたちの着る衣装に保護者がアイロンをあてたり、ロシアが頭にかぶる電灯式ろうそくの確認をしたりと準備を行う。5歳A児は準備された衣装を着ることで更に明日のロシア祭への希望が膨らんだようで、姉や友達とロシアの歌を歌ったり、förskola で作ったトナカイやリースの飾りを並べたり、カレンダーでロシア祭やクリスマスまでの日程を数えていた。

また4歳B児の家ではロシア祭で暗唱した詩の一部をプリントしたものを förskola から持って帰り、冷蔵庫に貼っていた。ロシア祭後、参観に来ていた祖母の前で再度詩を言ったり歌ったりしながら、ロシアについての絵を描く姿が見られた。その後クリスマスプレゼントに関しての絵が変わり、サンタやトムテなどについて iPad で調べ始めた。5歳C

児は Förskola でのロシア祭後、衣装を着たまま自宅に帰り（全員がそのまま帰宅する）自宅に戻っても衣装を取らずろうそくを付けた冠もかぶったまま遊び始めた。姉とブロック遊びをしていたが、途中からC児がロシア役になりロシアの歌を歌うなど、遊びがロシア祭ごっこへ変化をしていった。

このような家庭での遊びと förskola での遊びは図6のように往還し、一つの行事に関する遊びが場所によって内容質を変えている。それらはドキュメンテーションによって可視化されたり、登降園の際に保育者と保護者との連絡がなされたりすることによって新たな遊び（クリスマスへの遊び）へと変化し継続していく。

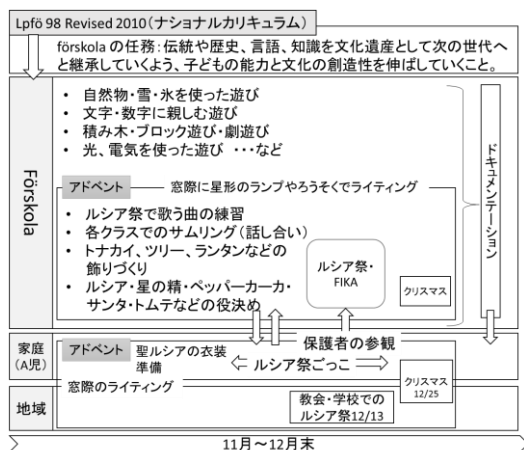


図6 A児の遊びの連続性

(3) まとめ

日本ではロシア祭に類似する行事としてクリスマス会がある。サンタクロースからプレゼントをもらい、クリスマスケーキを食べるといった多くの家庭でも行われる行事ではあるが、クリスマスの歌などを保護者の前で歌ったり、合奏をしたり発表会に近いものを合わせて行う園も多い。しかし歌や合奏の練習、作品の製作に多く時間を割いてしまい日常の保育や遊びから大きく逸脱してしまう事例も多くみられる。

スウェーデンのロシア祭は保護者が参加する数少ない行事である。保護者の前で子どもたちは歌も歌うが、成長の披露という意味ではない。そこで伝統的なロシアやクリスマスに関する歌を毎年繰り返し歌い、日常には着ることのない特別な衣装に身を包み暗闇とわずかな光の中で過ごすその時間を保護者と共に楽しむのである

アドベントシーズン、ロシア祭の当日には教会で就学前の子どもたちから大人まで幅広い年齢の聖歌隊や合唱団が歌声を披露している。このように教会が生活と深くかわり聖歌隊も身近にあるスウェーデンでは、学校教育・就学前教育の場において集団での歌を発表するということがほとんどない。

スウェーデン förskola から示唆されることは、子どもたちの育ちや学びの過程はドク

ュメンテーションで日々丁寧に可視化することによって、成長を促す・成長を披露するというねらいや保育的価値を行事に求める必要はなくなり、四季の行事・地域に伝わる行事を幼児の生活リズムに合った形で取り入れることが出来るということである。そしてゆとりある時間の中で行事の原点を大切にすることが地域や家庭との連続性を作り、日々子ども達の生活を彩り豊かにしていく。

早急な学びや成果を子どもたちに求めるのではなく、学びの芽生えを促していく環境を創り、遊びが滑らかに継続していく状況の構築が遊びの質を高めていくのである。

〔引用文献〕

(1) 松井剛太, 越中康治, 若林紀乃, 樟本千里, 藤木大介, 上田七生, 長尾史英, 山崎晃 「認定こども園のカリキュラムに関する課題と展望 エデュケア (educare) の概念からの検討」 幼年教育研究年報 第 31 巻 pp. 15-21, 2009 年

(2) 秋田喜代美, 佐川早季子 「保育の質に関する縦断研究の展望」 東京大学大学院教育学研究科紀要 51 巻, pp. 217-234, 2011 年

(3) 中坪史典, 上松由美子, 朴恩美, 他 「遊びの質を高めるための保育者の援助に関する研究: 幼児の「夢中度」に着目した保育カンファレンスの検討」 学部・附属学校共同研究紀要 (38), pp105-110, 2009 年

(4) 奥山順子 「幼稚園と家庭との連携 -園行事の実施と幼稚園教育の役割-」 秋田大学教育学部 『秋田大学教育文化学部教育工学研究報告』 第 19 号 pp113-124, 1997 年

(5) 吉次豊見 「幼保一体化に伴う保育構造の変容-S 市の保育施策および認定こども園における遊びの連続性-」 兵庫教育大学幼年児童教育講座編 『幼年児童教育研究』 第 23 号, pp83-93 2013 年

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計 2 件)

① 吉次豊見 遊びの質的転換と学びの芽生えを促す保育のあり方 - スウェーデンの保育実践から - 湊川短期大学紀要、査読無し、2017 年、第 53 集 pp41-48

② 吉次豊見 園・家庭・地域における幼児の遊びの連続性研究 - 季節的行事に関する遊びを視座に 関西教育学会年報、査読無し、2016 年、40 号 pp76-80

〔学会発表〕 (計 5 件)

① 吉次豊見・幸田瑞穂 乳児期の「学びの芽生え」を育む保育環境-スウェーデンの

乳児保育室環境から- 日本保育学会第
70回、2017年5月27日、(岡山県倉敷市
川崎医療福祉大学)

- ② 吉次豊見・幸田瑞穂 スウェーデンにお
けるロシア祭の保育的価値-生活を彩る
行事のあり方とは-日本乳幼児教育学会、
2016年11月27日、(兵庫県神戸市 神
戸女子大学)
- ③ 吉次豊見 季節・伝統的行事に関する遊
びの連続性-スウェーデンのロシア祭か
ら- 日本保育学会第69回、2016年5月
7日、(東京都小金井市 東京学芸大学)
- ④ 吉次豊見 園・家庭・地域における幼児
の遊びの連続性研究 - 季節的行事に関
する遊びを視座に 関西教育学会、2015
年11月、(京都府京都市 佛教大学)
- ⑤ 吉次豊見 スウェーデンの保育における
季節的・伝統的行事 日本保育学会第68
回、2015年5月9日、(愛知県名古屋市
椙山女子大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉次 豊見 (YOSHITSUGU TOYOMI)

湊川短期大学 准教授

研究者番号：00614877